



第19回総会 記念講演「地域における共生の街づくり」開催報告

講師：齋藤 兼三さん（わっぱの会代表・共同連代表）

2023/5/30 万国橋会議センター

地域における共生の街づくり

— 大曾根地域共生の街づくり構想に向けて —
「ソーネおおぞねの誕生と未来」

わっぱの会代表、共同連の代表でもある齋藤兼三さんに記念講演を頂きました。プロフィールでは、ボランティアグループの活動の中で23歳の時、一軒家を借り、障害のある人ない人との共同生活体立ち上げ、翌年の共同事業所づくりから50年余「差別とたたかい、共生・協働の社会を目指した」活動を一貫して続けるとあります。

齋藤さんのパワーの源は若くしての決意と信念にあり、ひたすら歩み続けて来られた桁外れの強さと温かさには感嘆しました。

愛知県公社住宅「大曾根住宅」(480戸)内のスーパー跡地(1000㎡)に2018年春、「ソーネおおぞね」が誕生。事業目的は、①障害ある人、生活困窮の人、地域の高齢者など働きたい様々な人々と共に働く場を作る社会的事業所の創出。②その働き場が日常的な地域住民とのふれあいの中にあることで人と人との交流を通じて、差別や社会的排除をなくしていくこと。③この場全体が地域住民の交流の場となり、地域住民の主体的参加を生み出していくことで真の地域共生社会づくりの拠点となることです。

地域総合交流拠点として、資源、カフェ、ショップ、障害者事業所の共同受注・販売センター、ホール、相談、リサイクルショップなど多様な機能をそろえています。協会が「はっぴい&きゃりーくらしのサポート事業」の設立に関わった経緯もあり、その6月に東京のワーカーズの方たちと10人ほどで見学に行きました。見上げるような高さの11階建ての公社の一階、広々としたスペースは人々の活気で満ちワクワクしたことを覚えています。帰ってから、反町カフェぽらんで「しげんカフェ」ができないかなど検討しましたが、環境や条件が整わず実現には至りませ



んでした。

その後、「ソーネおおぞね」では、地域の子供たちの仕事体験、子どもも高齢者も参加する食堂、夏祭り、ソーネ基金、生ごみリサイクル、子供将棋大会や小学生の勉強・食糧支援へと取り組みが大きく広がったと聞き、地域の総合拠点としての実態づくりが名実ともに進められたことを知りました。

2021年11月、「ソーネおおぞね」を活用し、住宅団地再生を軸とした地域社会再創造事業が構想されました。共生住宅20戸、障害者グループホーム10戸、サービス付き高齢者向け住宅39戸に地域交流の場も備えるもので17億円の事業となりましたが、「事業を広げるためにやってきたのではなく、その人たちと向き合ってきたら広がった」という齋藤さんの言葉に、スケールは違えど協会の構えと同じ意識を感じました。イタリアの社会的協同組合を視察しヒントを得たことも共通しています。制度をよく知り、制度に合わせず、市民側に引き寄せ事業に生かす気概や手法は大変参考になります。働くことと暮らすことを共存させるといふ夢を新たな中間支援組織に期待したいと確信できる記念講演でした。 (中村 久子)



「ワクワク感満載！大曾根の地域共生の街づくり」

福祉事業を行う W.Co の一員として 20 年活動していく中で、設立趣意書に掲げている「地域福祉の充実に寄与する」ことの実現の難しさを感じてきました。開所当時の情熱は徐々にしぼみ、介護保険制度に振り回され、事業優先となり、W.Co の組織運営も難しい現状ですが、今回の講演を聞いて、これぞ地域福祉をつくるという実践なのだとその発想にワクワクし、困難に立ち向かっていくパワーと情熱に力をもらいました。

「ソーネおおぞね」では、広い1階スペースを活用し、子供も高齢者も障害者も「ごちゃませ」に楽しめ、「みんなでつながる」仕掛け満載。また大曾根団地では、住宅を整備し居住支援を展開。分断社会の中で埋もれている生活困窮者への生活支援、就労支援などは、安心して暮らせる住まいがあってこそ。そして住まいとは単に場所をあてがうだけでなく、その地

域で就労し、地域に溶け込み、地域の人々と共に暮らしていく生活そのものなのだと感じました。現在事業数 33、事業高は 17 億と聞くと、あまりの規模の大きさに驚きますが、50 年の積み重ねと齋藤さんの思いの継承によるものであり、あきらめずに活動することが大事であることを実感しました。「地域包括ケア構想は全く進んでいない！」と齋藤さんも怒っていましたが、地域の主体性や自主性に押し付け、必要な制度や仕組みを作らない国には頼れない。ならば市民の活動で実態を作っていくしかない。W.Co 協会の活動方針でもある「共に働く・暮らす」の実践は、まだ道半ばとはいえ、今回の講演は私たちの今後の活動に勇気を与えてくれました。（荻野 慶子）



当日のアンケートから☆☆☆

自分の周辺の事しか目に入っていなかったと思います。人間の一生は長いので、自らが障害や病気になる事も有るし、認知症になってもやはりだれかに世話になるのだから、安心して、世話になれるよう地域をつくる事が必要なのだと。

単独で何かをするのは難しいけれど、行政や多団体から資金を出してもらい、大きな事業ができる事がわかり、勉強になりました。

制度をなげくのではなく、それなら制度を使わずにやろう、運動体をつくろう、しくみを考えようという共生をスローガンだけであきらめないという不屈の姿勢です。これから「はたらっく」の先輩方と自分の住まう地域でどのように「共生の街づくり」をしていけるのか考え続けていきたいです。

物事は1つのやり方考え方だけではうまくいかないことがあるが、他の手を考える、次のやり方でやってみるといこと。これだけ多くの事業を成功させてきた方でもうまくいかないとおっしゃることがたくさんある中であきらめてはいけな